

---

# 百怪 報いの怪 8 話

annmin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

百怪 報いの怪8話

### 【Nコード】

N5021M

### 【作者名】

annmin

### 【あらすじ】

因果応報の怪。行いはどこかで清算される。

「首」

「人の恨みは形となる。

決して軽く見たり、近付いてはならない」

今は中堅の企業に勤める男性から聞いた話。

若い頃の彼は、高額な商品をローンを組ませて買わせるという、いわゆる

“ローン商法”をする会社にいた。

「ノルマは無いけど、“目標数値”っていうものがあってね。

それがノルマみたいなもん。

それさえクリアしていれば、気楽な会社だったけど」

彼はそこそこ働いていたが、売上がトップクラスともなると、『ここまでやるのか』という人間もいる。

「ローンの支払いが滞ったりすると、その催促も仕事のうちなんだが」

ベテラン社員は、その“方法”に長けていた。

脅し、なだめ、他から借金させてでも、

会社への支払い分は確保する。

「その中でも、歳はまだ若かったがKってヤツがいてな。

アイツは最悪だった。

家族、親族まで標的にするんだから」

手段はいろいろあった。

『ブラックリストに名前が載るよ』

『お子さんいるでしょ？ まともな結婚とか出来なくなっちゃうよ？』

『確かに直接は関係無いかも知れないけどさあ、世間はそう見ちゃくれないよ？』

違法ストレスなどというものではない。完全に違法である。

ただ、少しでも弁護士や警察の匂いを嗅ぎ取ると、一気に引く。

そういう処世術だけはわきまえており、非常に性質が悪かった。

「でも社長や上司からの受けは良かった。売上を持つてくる人間が一番エライんだからね」

ある日、年配の上司の1人が会社を1週間ほど休んだ。

休暇後、出社した彼は辞表を提出した。

「その人もなかなかの“ヤリ手”だったんだが……

何でも息子夫婦が事故に遭い、残された孫を引き取りに行っただと」

“祟られたのでは”という噂が社内ですさやかれた。

それ以前にも、社長が交通事故を起こしたり、幹部の身内が病気になったりする事が、ここ数ヶ月で続いていたのだ。

Kはそれを豪快に笑い飛ばし、

「くだらねえよ。じゃあ俺はどうなんだ？

あの人より成績良かったんだぜ？

怖いなら、とつとと辞めちまえよ」

そう言っただけで相手にしなかった。

それから3日後、彼は1人残業で会社に残る事になった。

Kのような売上の良い社員は、社長自ら週に何度が飲み連れていくが、いつもノルマギリギリの彼には無縁だった。

自分のエリアの照明だけ付けて、薄暗いフロアにただ1人だけ。

早く書類を片付けて、何とか終電までには帰りたいと思っていると、暗闇から音が聞こえてきた。

「何か……“シュー、シュー”っていう、

生き物の呼吸みたいな音だった」

護身用に身近にあった定規を持つと、彼はその音のする場所へ近付いた。ふと、彼はその足を止めた。

こちらから近付くまでもなく、音が向こうから近付いてきている。

剣のように定規を前方に構え、その出現を待った。

龍がいた。

暗闇から姿を現したそれは、水墨画から出てきたような長身をくねらせて、中空に浮かんでいる。

予想外の侵入者に目を離せないでいると、その手と口に何かくわえているのが見えた。

「首でした」

両手にはそれぞれ、中年の男女と思われる首があった。

そして口の中にある首を見て、彼は腰を抜かした。

Kの顔だった。

それは苦しそうにしていたが、龍がアゴに力を込めると“ぐぶばああ”と言って血を吐いた。

飛び散った血が彼の服を染めた直後、そのまま失神した。

「気がついたら翌朝でした」

Yシャツを確認したが、どこにも血の跡は無い。

だが家に帰る時間などなく、仕方なく彼はそのまま勤務する事にした。

やがて出社時間になり、社員がゾロゾロと入ってくるが、Kの顔が見当たらない。

「昨夜、社長に連れられた酒の席で、突然血を吐いたらしい」

元々が酒豪であり、彼自体健康を気にするタイプではなかったためか、いつの間にか肝臓の病状が進行していたようだった。

翌日、社内連絡でそのまま入院したと通達があった。

「その月で10人ほど辞表を出したよ。自分もその内の1人だった」

数年後、その会社が入っていたビルの近くへ行く機会があり、その場所をのぞいて見た。そこは広い駐車場になっていて、ビル自体がキレイに無くなっていたという。

「守る」

フリーライターの知人から聞いた話。

「身内の恥のようで、恥ずかしいんですが」

彼には、姉と兄がいた。

長女、長男、次男（彼）という3人兄弟で、姉とは仲が良かったのだが

「3歳違いの長男がねえ……」

『暴君』という言葉がピッタリ。

とにかく、手の付けられない人でした」

他の同年代の子供と比べて体格が良く、暴力を全くためらわない性格だったという。また美形で、常に女子の人気は高く、中学卒業の時はボタンからネクタイ、上着まで全部“あげた”ほどだった。

「家の中では僕は“道具”でしたね。

母は兄を溺愛していたし、父は家庭には無関心。

唯一姉だけが事ある毎に注意してくれていましたけど、女ですから限界がありました」

兄が高校に入ると暴力の度合いは増した。どんな些細な事、というレベルではなく、気が向いたら殴る。

鼻血が出るまで殴り、その10分後には



テレビを見てゲラゲラ笑っている。

「殴る理由なんて、あってないような  
ものです。

目の前を通り過ぎたから、命令した  
買い物が遅かったから……

命令したい時に寝ていたから、という  
のもありましたね」

彼がアルバイト出来る年齢になると、今度は  
彼の買ってきたゲーム機などを勝手に売って  
小遣いに換えたりもした。

「お前がそういうオタクくさい趣味に使う  
より、俺が遊びに使ってやった方が金も  
喜ぶってもんだ」

母親がそれに同調し、かばうものだから  
兄はますます増長した。

そんな兄も高校卒業後、20歳になって  
から1人暮らしのために実家を離れた。

自立とは言っていたが、ずっと後で母親が  
全額負担していた事を知った。

「さすがに実家じゃ、女どもと遊べない  
からよ。

お前にやわからねー世界だろうが」

そんな兄が、2年後に実家に帰ってくる事にな  
った。

すでに大学へ進学していた彼は、実家から出る事を決意。

父親に保証人になってもらった他は、全て溜めていた自費で1人暮らしを始めた。

その1年後、兄から彼へ助けを求める電話があった。

母方の母親、つまり祖母が緊急入院し、母が看護に出かけたのと、当時体調を崩して食事の用意も満足に出来ないので、実家に来て自分の世話をして欲しい、との事。

「兄が一度1人暮らしをして以来、ほとんど顔も合わせてなかったので……

バイトと大学の合間でいいなら、と引き受けたんですよ」

結局、1ヶ月ほど兄の世話をした。

兄は見た目にも少し痩せており、原因は不明だが、何かの疲れが蓄積していたのだろう、そう医者に説明されたそうだ。

体が弱っていた事もあるのだろうが、兄は素直に彼に感謝した。

その1年後、父親にアパートの契約更新のため、再度保証人になって欲しいと頼みに行った時の事。

体調が回復していた兄が彼の目の前に立ちふさがった。

「まず俺に許可を取れ」

何で兄に関係があるのか？ と聞くと母親が割って入ってきた。

「人生の先輩として、俺はお前に言う権利があるんだよ」

母親はそれにウンウンとうなづき、父親は黙ってそれを見ていた。

「要は、“金を出せ”って事だったんでしょうけどね。」

正直ここまで腐っていたとは」

そもそも、人生の先輩たる兄は戻って来て以来、ニートも同然で、逆に家からお金をせびっていた。

こちらは自活で精一杯で、とてもじゃないが家に回すお金などない、とにかく余裕は無いと告げると

「じゃあ土下座しろ。誠意を見せろ」

血が沸騰するのを抑えて、とにかく今ここでガマンさえすればいい、そう思って彼は頭を下げた。

兄はその“上”にかかとを乗せると

「心の底から土下座してねえなあ？」

無言で彼は立ち上がり、その反動で兄はひっくり返った。

その時でも彼と兄の身長は10cmほど間違ひ、勝てないだろうが、せめて何発かお見舞いしてやろうと覚悟を決めた。

「デメエよお!？」

兄は立ち上がり彼の胸倉をつかむ。

そのまますごい兄の目をじっと見上げていたが、

「あつ」

不意に兄がそう声を発すると、つかむ手の力が緩んだ。

そしてヘナヘナと床へ崩れ落ちる。

それを見ていた母親が絶叫して、兄の名を呼びながら彼を突き飛ばした。

「母親が救急車を呼んで……」

保証人は、その後父がサインしてくれました」

兄は以前かかり付けだった病院へと移送された。

そこで一週間ほど入院して様子見た後、

「これは多分、西洋医学ではなく、

東洋医学に診てもらった方がいい」

と、ある鍼医を紹介された。

兄は母に付き添われてその鍼医に紹介状を持っていた。

施術の後、鍼医は2人にこう告げた。

「……その若さで、ずいぶんと、恨みを  
買っておりますな」

返す言葉が無かったという。

「後で聞いたんだけど、外でも兄はいろいろ  
問題を起こしていたらしい。

自転車ドロやカツ上げで警察のお世話にも  
なっていたって。

もちろん、女絡みのトラブルもね」

2年後、またアパートの契約更新に伴い  
実家を訪れた彼は、兄と再会した。

「最初、どこのおじいちゃんかと思った  
ほどで……」

目はくぼみ、髪は薄く、そのほとんどは  
白髪になっていた。

顔も体も以前とは比べ物にならないほど  
痩せこけ、実年齢より30は老けている  
様に見えたという。

もう恨んではないが、一体どうして  
こんな事になったのか？

そう聞くと、兄は唇を震わせながら弱々しく  
語り始めた。

「……あの時、お前の胸倉をつかんだ時な」

彼の顔が、石で出来た地蔵の顔に変わった。  
驚いて凝視していると、その穏やかなそうな  
口が開き、

「もうお前は守ってやれん。  
今までの分も返してもらおう」

そう告げたとたん、体の力が抜けた様にな  
り、気付いたらベッドの上だったという。  
母親にその事を話すと、ワッと泣き崩れた。

「母の実家は、三陸のある山村だったんです  
けど……」

兄が赤ん坊の頃、一時病気で危ない時が  
あったらしくて。

その時、村にあった地蔵に毎日お祈りして  
いたそうです」

その地蔵は兄も彼も見た事があつた。

「俺は神仏に見捨てられた。  
あれが最後の一線だったんだろう。  
自業自得だ……」

ベッドに横になったまま、兄はそうつぶやいたという。

今は30を過ぎているが、一生もう元には戻らないだろうな、そう言っただけ彼は視線を落とした。

「飾り」

とある医者の話。

ある倒れた患者が救急車で運ばれてきたのだが、かなり弱っている様子で、栄養補給のために点滴を受けさせる事にした。

話を聞くと、どこかの住職らしいのだが、1年ほど前より体調を崩していて度々通院していたらしい。

ただ、まだ代を継いだばかりの人で、そこまで年配という事はない。

せいぜいが40代に見えたという。

「まあ衰弱からくるものでしたから、取りあえず体力を回復させようとしたんです」

看護師から相談を受けたのは、点滴が終わりその患者の容態を確認した後だった。

「先生、これ」

おずおずと女性看護師が差し出したのは、点滴用のチューブだった。

その異常は一目でわかった。

「どうしてこんなボロボロなのを使っただの？」

看護師は首を左右に振り、その質問を否定した。

考えてみれば、こうまで傷だらけの管を使う理由はない。

知っていればその時点で問題になったはずだ。

「取りあえず、全てのチューブの確認を指示して、その時は自室に戻ったんだ」

しかし、それから点滴用のチューブがボロボロになる事が何度かあった。

不思議なのは、全てのチューブが

そうなるのではなく、決まって

その患者に使用した後、ボロボロになっているのだという。

「まあ見た目と違って簡単に切れるものではないからね。

それこそ、床に固定して包丁で切るくらい



しないと」

点滴している間は問題無いにしても、気味が悪いのは確かで、その患者に点滴を施している時は、それとなく確認のため見舞うようになった。

「夜中の1時くらいだったかな。寝る前に点滴をセットしたんだが」

ふと、彼の病室をのぞくと、非常用の豆ランプが薄暗い中で一際目立っている中、その光が点滴のビニールバッグに反射していた。

そして、当然下にチューブが続くのだが

「何ていうのかな……輝いている、とかじゃなくて。

黒い画用紙の上に「ごま塩をパツとバラまいた感じで」

白い点のようなものがチューブにまわり付いていた。

それも無数に。

正体を確かめるべく、薄闇の中目をこらすと、

「犬とか、猫とか、それと亀、インコ  
みたいなのもいたな。

ただ、そのどれもが」

首だけだったという。

それらの首が、競うように点滴用のチューブに噛み付いていたのだ。

白く見えたのは彼らの牙だったらしい。

ただ、噛みづらいのか、四苦八苦して何度も何度も位置を変えていた。

慌てて部屋の電気のスイッチに手を伸ばす。

明かりが室内を照らし出すと同時に、それら

動物の首は1匹残らず消えた。

チューブを急いで確認すると、またボロボロに傷付いていたという。

「仮にもお坊さんだしね。

そんなものに恨まれてるとは

思わなかったんだが」

後に耳に入ってきた話では、彼は先代から住職を継いだものの、元々かなりの遊び人だったそうで、ギャンブルから女性関係まで節操の無い人間だったらしい。

あちこちに借金を重ね、今で言うところの“ペット葬”なるものを始めたらしいのだが、墓など作らず、遺骨はゴミとして廃棄してしまう有様で、後に発覚した時は寺の存続に関わる問題になった。

「その時は、そんな事知らなかったん

「だけどね」

ただ、未だにあの時の動物たちの顔、  
チューブを噛み締めて飾りのように  
ぶら下っていた光景は忘れる事が  
出来ないという。

「歴史」

先日、道場（仏教でいうところの、修行僧の  
集まりの場）で、外国人へのビザ免除の話が  
話題に上った。

「経済効果が欲しいのはわかるんですが、  
治安の問題もあるし……」

トータルで、日本に得てあるんですか  
ねえ」

私が消極的な疑問を口にしたところ、師匠が  
口を開いた。

「これから独り言を言います」

こついう事を言う場合、“返事も質問も  
受け付けません”という意味だった。

「日本に近い地から、モラルの無い連中が  
やってくる。」

盗み、騙し、暴力何でもあり。

で、最近、各地で重要文化財だとか、歴史のある物が盗まれているよな。

基本的に、少し郊外の神社やお寺だと管理者がいない。

いても常にいるわけじゃない。

たいてい、そういう施設には二通りある。

“奉っている”か“封じている”かだ。普通の日本人なら手出しはしない。

“触らぬ神に何とやら”だからね。

ただ……余りにも人が関わらないと、封印が“薄く”なるもある。

戦後60年以上経っているし、封印が破れるのもチラホラあるだろう。

“奉られている”のだったら、勝手に場所を移動したら怒る。

“封じられている”のだったら、持って行かれた地でいろいろと……？

“何で日本にとって何の得にもならない事をするのか？”

このあたりに、その理由が隠されているような気がするんだけどね。

特に近頃の、そのビザ免除や緩和している

国の天変地異を見ているとさ。

何せこの国は“歴史が古い”。

知らないフリをして“させる事”くらい、  
平気でやるだろう」

一息ついてお茶を飲む師匠に、

「……知らない間に、危険な“掃除”を  
させているって事ですか？」

と問うと、

「独り言に質問されてもなー」

そうとぼけられた。

「死に金」

「金には、いろいろな念が憑く」

何年前かに、ある法事で“門番”を務めた  
時があった。

そこで報酬代わりに、その住職にお話を  
聞かせて頂いた。

「しかし今は、通帳とか数字の上だけ  
だったりしますが……」

それでも憑きますか？」

そう言うと言を横に振った。  
いわく“昔より憑きやすい”という。

「オンラインになって、“流れ”がはつきりするようになったからね。  
その物じゃなく、“流れ”に憑くんだけ、  
ああいうのは」

だから、会社の経理など、知らず知らずのうちに“憑かれて”いる場合もあるらしい。

「一時的にしる、“流れ”がそこで留まってしまつと、念もそこに溜まる。

それに、金の管理を任される人間ってというのは、それなりの責任のある立場だ。

金が“無関係”とは見ちゃくれん」

念の溜まつたお金はどうすればいいのか、“浄財”という言葉があるが、それは可能なのか聞くと、

「もちろん出来るが、金額によっては受けられない場合もある」

数年前、自分の寺で“その手の金”を相談された事があった。

総額にして5億円はあったという。

「どこに行っても断られて……」

持ってきたのは、人の良さそうな初老の男性であつたが、一般人では無い事は、小指の欠けた左手が物語っていた。

男が言うには、自分の妻に始まり、古い部下や仕事を任せていた新人など、実に6人ほどが病死や事故死を遂げた。

「知り合いの寺に話してみたら、その金の原因だつていうから……  
半分出すから何とかしてくれ、と言つたら  
“そんな金、絶対受け取れない”とまで  
言われてしまつて」

方々の寺や神社に行つたが、一見で断られ、かと言つて譲渡や投資に使えば、税務署が黙っていない“金”である。

住職は取り合えず金の一部を受け取つて、桐の箱に入れて念仏を唱えた。

「すぐに白い煙が上がつてな。  
箱の表面に黒い筋が走つた。  
……地獄の火だ」

その現象を見て頭を抱える男に向かつて住職は聞いた。

「生きたいか？」

男はぶんぶんと首を縦に振った。

住職は奥から別の箱を持ってきた。

そこに先ほどの金を入れ、また念仏を唱え始めた。

「今度は、箱の表面にチカチカと火花が散ったが、それだけで終わった。

“ 何とかなると思うが、半分も返って来ないかも知れん。それで良いか？”  
そう聞いたら、額を畳にこすり付けていたよ」

翌日、寺で5億円を預かった。

その日のうちに、予め連絡してあった知り合いの寺へ、それぞれ分けて持ち帰ってもらったという。

「樹齢800年を越えた霊木で作った箱なんぞ、そうそう無いからなあ。

持っている寺に片っ端から連絡して、

それこそ、北は北海道から南は九州まで

日本全国に分割したんだ」

寄進という形を取り、1年後、それぞれの寺へ頭を下げていくらかでも返してもらえ、そう男に告げた。

結局、2千万ほどが男の手元に戻ってきたと



いう。

「その後、足を洗ったって聞いたしな。  
老後の生活費としちゃ充分だろう」

しかし、ちよつと取り過ぎじゃないですかね、と意見したところ、

「霊木で出来た箱、軽く億超えるんだが……  
上手く行くとは限らんし、商売にしたら  
割に合わないと思うがね」

ちなみに、その時の住職の取り分は5千万円  
ほどだったという。

「手と足」

一緒に会社で働いた事のある知人から、  
酒の席で聞いた話。

「昔の知り合いの話なんだけど」

だから、知人の知人の話、という事になる。  
その男性はある健康食品系の会社に勤めて  
いた事があった。

「社長がね、最悪の人だったって」

最初は無料の健康診断とかテストとかで  
相手を信用させ、その後に高価で怪しげな  
薬を売りつける。

体質改善から痩せ薬まで、種類はいろいろ  
扱っていた。

「従業員も使い捨て。

人騙すような商売だから、神経がまいって  
しまっただよね。

労働時間もあつて無いようなもので、  
サービス残業や出勤はザラ。

だからどんなに頑張ってもみんな2年  
くらいで体調壊すんだと。

そうになると“健康上の理由”で片っ端から  
切っちゃっただ」

抵抗する人間もいたが、その時はお抱えの  
弁護士を入れて、有無を言わず辞めさせ  
ていた。

「そいつの時は、タイムカードの一部を  
証拠として押さえて労基署まで行つて、  
会社で“残りのタイムカードも出せ”と  
指導させるところまでやったらしいけど」

しかし、相手はそういう商売と承知の弁護士  
である。

一応労基署に残りのタイムカードを提出した  
ものの、

「これはアンタだけに見せたんだ。  
もし他の人間に見せたら、職務上知りえた  
秘密をバラしたって事で、公務員法違反で  
アンタを訴えるからな」

そう職員を脅したという。  
本来、そういう脅しが成立するわけもないの  
だが、事無かれ主義・世間知らずの公務員は  
あつさり引つかかる。

「今まで何人もその手で、泣き寝入りさせて  
きたんだろ？」

その知人が去年、社長に会う機会があつた  
という。

場所は公園。

浮浪者、とまではいかないが、すっかり  
身なりのみすぼらしくなつた彼が社長と  
気付くまでに、時間がかかった。

「どうしたんですか？」

そのあまりの格好に驚いた知人は、  
“ここじゃ何ですから”

と彼を食事の出来る場所へ誘つた。  
社長は何度も頭を下げ、一緒に店に入った。

「分かりきつていたけど、“会社は？”と  
聞いたら“無くなつた”と」

彼は黙って料理を2人分注文し、目の前の彼に差し出した。

「おいしいおいしい。初めて人の情けを味わった。

久しぶりのまともな食事だ」

食事をしている最中に、社長の動きがどこかぎこちない事に気付いた。  
見ると、右腕がほとんど動いていない。  
その視線に気付いた社長が先に答えた。

「持っていていかれたんだ。もう動かん」

何に？ と聞くと“神様”という。  
そしてポツリポツリと語り始めた。

「気がついたら手を引かれていた」

頭巾のような、頭までかぶる白い着物に身を包んだ女性に手を引かれ、暗闇の通道を歩いていった。

自分は家にいたはず

この女性は誰なのか？

いったいここはどこなのか？

自分はどこへ連れて行かれようとしているのか？

何もわからなかった。

「あの、どこへ行くんですか？」

足が止まり、振り返った女性が答えた。

「あなたの望むところへ行くのです」

その顔は恐ろしく無表情であつたという。暗闇のはずなのに、女性の表情はハッキリと見える。

恐怖が心の底からわいてきたが、なぜか抵抗出来ず、うながされるままに歩みを再開した。

「砂利の上を歩いているような感覚だつた」

そのうち、匂いが鼻についてきた。腐った卵を焼けばこんな感じが、と思った。ふと、道の先に何かある事に気付いた。小さな門が見えてきたという。

“……あそこに行くのか？”

よくある、木で出来た両開きの扉。

旅館の裏口や、庭に入る入り口のような

“この門は絶対に入つてはいけない”

本能が全身に告げ、筋肉を硬直させる。

「でも、ダメだつた。

まるで子供が風船を引っ張るように、軽々と連れて行かれたんだ」

先導していた女性が、片手を門にかけた。  
口は、口だけは自由に動く。  
彼はあらん限りの言葉を使って懇願した。

「悪かったです。」

申し訳ありません。反省します。  
心を入れ替えます。

どうかお許してください」

門の片側が開かれ、女性が振り向く。  
顔は相変わらず無表情のまま  
しかしそれで動作は止まった。  
自分がツバを飲み込む音が大きく聞こえ、  
次の動作を見守る。

「では、置いていきなさい」

「何でもします。」

何でも置いていきます」

否も応も無かった。

「手と足、どちらがよろしいですか？」

悩む余裕は無かった。

「て、手を」

「右と左、どちらがよろしいですか？」

「み、右を……」

彼は左利きだったが、考える余裕も無く  
出た言葉だった。

右手は彼女がつないでいる。

「では」

そのまま女性は手を引つ張った。  
すると、彼の右腕は肩から玩具の人形の  
ようにスポツと抜けた。

ハッと目が覚めると、彼は自宅にいた。  
ソファに座って、テーブルに突っ伏して  
いたという。

昨夜の状況を思い出すにつれ、酒を飲んで  
そのまま寝入ってしまったのだとフラフラ  
する頭で理解してきた。

「妙な夢を見たもんだ」

両手に力を入れて上半身を起こそうとした  
が、右腕に全く力が入らない。

ソファに背中を預けて右腕を見ると、その  
肩の下に何かがめり込んでいた。

「ツマミを刺してあるプラスチック製の  
楊枝だった。

不思議と、痛みや出血はほとんど  
無かったが」

すぐに救急車を呼び、彼は治療を受けた。それは神経を傷付けており、完全には元に戻らないだろう、そう医者に告げられた。

「だから、今右手は赤ん坊くらいの握力しかない」

酔った上での事故として処理され、手術後リハビリのために入院したが、その最中に海外に作ったサプリメント工場でトラブルが起きたとの連絡が入った。

「現地の責任者が資金を持ち逃げしたんだと。」

ただ、これからいろいろ起こるだろうな、何となくそう思ったのを覚えている」

それからすぐ、お抱えの弁護士が他社で税理士と組んでの脱税容疑で逮捕された。社長も関連しているのではと疑われ、ベッドの上で聴取に応じたという。

夢を見てから半年ほどで会社は会社更生法を適用。事実上倒産した。

「今は、どこかお勤めしてるんですか？」

「……社長を“やらされている”」

「？」



「今は、中小企業向けの融資を国が保証してるんだ。

ほとんど潰れかけている会社に可能な限り融資して、どこかのタイミングで倒産させる。

社長経験があつたから、それで社長が逃げた会社の後釜とかやらされてるんだ」

追加で注文したビールを飲み干すと、そのジョッキをしげしげと見つめながら

「いつか切られるために働いているんだ。銀行にや逆らえないほどの借りがあるからね。

個人的な金を持つのも許されない。

……いつ用無しになるか、毎日ビクビクしながら会社行ってるよ」

店を出る時、“社長”は何度も頭を下げた。一応名刺をもらったが、その時に見たサイフは、お札もカードも無くペラペラだった。

ネットでたまに会社名を確認しているが、まだ倒産はしていないという。

「回収」

特定の宗教や、戒律の厳しいところ  
なければ、他の教団と交流している  
仏教系は多い。

先日、F県のある神道系の教団へ会合に  
行ってきた方から、こんな話を聞いた。

「その地方では結構大きい教団だった。  
始まりはここ100年ほどと新しい  
ようだが」

県内各地に10箇所以上の支部を持ち、  
それぞれ30人程度の信者を抱えていた。  
彼が行ってきたのは本部だったが、その  
幹部クラスの人間から聞いた話だという。

「神様の力ってね。無限じゃないんだ。  
あれは有限なんだよ。」

仏教はどうなってるか知らないけど」

ある支部に、1人の青年がいた。  
青年は真面目に支部に通い、たいていの  
ボランティアや手伝いを引き受けていた。

「その時の、その支部長がなあ。  
当時40過ぎの女性だったが」

元々青年が大人しいという事もあったが、  
事ある毎に青年を使うようになった。  
教団が主催するバザーやチャリティー、  
果ては個人的に支援している議員の選挙まで

手伝わせるようになっていった。

「何ていうかな。声がでかくて図々しくて、遠慮するような場面で平気で要求するといつか……」

誰もまとめ役を遠慮したために、支部長になつたような人物だつた。

遠慮無く他人に命令出来るような性格だったので、イベント等では取り合えず“重宝”されたという。

「しょせんは素人の集まりだからね。

ああいう人もいなくちゃ、とは思つていたんだけど、間違いだつたねえ」

ある時から、真面目に手伝いをしていた青年が一切口を利かなくなつた。

支部、施設には顔を出すのだが、他の信者と会つても無言で通り過ぎる。

また、行事で配られるお菓子や粗品を一切受け取らなくなつた。

親しくしていた信者が何とかなだめて話を聞き出したところ、ここ数年生活苦で悩んでいたが、先日生活破綻したという。

「その青年……7年近くいたから、もう30を越えていたけど、びっくりして」

通常、そういう悩みがあれば信者が人脈なり何なり用意して、助けようとする。

しかも彼はずつと文句も言わず手伝い続けてくれた人間である。

破綻するまで放っておいたというのは、宗教うんぬん以前に人としてどうなのか。

そんな状態になるまで誰も彼を助けようとしなかったのか、教団で問題になった。

そこで支部長に問い質した。

特に彼女は知り合いの選挙にまで青年を駆り出している。

彼女は答えた。

「あー、何度か相談受けたけどね。

ちよつとタイミングが合わなくて。

あの子も運が悪いのよねえ」

“運が悪い”、で7年近く一切人脈を使わなかったという答えは、不信感をあおった。

さらに他の信者から聞くと、その青年のためにという理由で、何度か支部長から人脈や紹介を頼まれたという。

「後で調べたらね。それ全部自分のコネに使っていたんだよ。

その青年を徹底的に“ダシ”にしていたわけだ」

その事を突きつけても、

“その時は連絡が取れなかったから、他の困っていた人間に使っただけ”

とか、

“他の用事に追われていた、その青年だけ相手にしているわけにはいかない”

と悪びれる様子も無い。

さすがに心ある人が、今からでもいいから何かしてあげれば、と諭したが

「でも、口利いてくれないんでしょう？

いいじゃないのよ、放っておけば。

信者はあの子だけじゃないのよ、私は忙しいの」

そう言って開き直った。

異変は、その年の暮れに起きた。

その支部長が青年をダシに手に入れたコネで、自分の知り合い（信者ではない）を方々の会社や公務へ就職させていたのだが、

「彼女が紹介した人材が、職場で次々と問題を起こしたらしい。

元々勤務態度も良くなかったらしいが」

全部で6人ほど紹介していたのだが、それら全員が問題を起こし、警察沙汰にまでなっていた。

中には、女性に乱暴したというものであつたという。

「知り合いの議員に、警察に手を回してもらおうとしたけど、その議員に紹介した職員まで問題起こしていたらしいからね」

さらに年明けて翌月、彼女の家が全焼した。保険に入っていたが、その契約書の更新は彼女が手続きを忘れていたため、1週間ほど空白期間があつた。

火災があつたのはまさにその期間で、書類は揃っていたものの、空白期間は保障されていないと保険会社と裁判になった。

結局保険金が支払われたのは半年後。

その間、家族とアパートで暮らしていた彼女は椎間板ヘルニアを発症し、支部長の辞退を病院の電話から連絡してきたという。

一方の青年はというと、生活苦からしていた借金が、もう払えないというところまで追い込まれていたが、その限界という月に利息法が改正され首の皮がつながった。

次の月に勤めていた会社の取引先から要望され、転職と同時に収入UP。

今では、小規模のプロジェクトチームを任されるほどになった。

その後、支部の信者と普通に会話するようになったが、件の前支部長に対しては、

『顔も見たくない』

と会うのを拒絶しているという。

「他の信者から“事情”を聞いたろうし、まあ仕方無いけどね。

……直接“返す”機会が無い以上、多分まだまだ終わらないよ」

神様が、彼女の運とか何かを、青年に持っていったという事ですか？ と聞くと

「ぶつちやけて言えばそうだね。

罰とかそういうんじゃないくて、最初に言った通り神様の力は“有限”だから。

だから青年を助けようとした時、足りないから、全然借りを返そうとしない前支部長から回収していったんだろう」

自然の怪の『お返し』に通じるような気がした。

「仲間」

数年前の事。

海外からキリスト教系の方に来てもらい、講義をしてもらった事があった。

講義は無事終了し、その方をホテルに送り返そうという時、突然怒鳴り始めた。何か怒っているようなのだが、なにぶん英語オンチなのでわからない。よく見ると、入り口にちょうど来た男女を指差し、怒鳴っているようだった。

男性は50過ぎ、女性には20歳そこそこに見えた。

その男女へは他の誰かが対応し、また落ち着いてもらうために一同広間へと引込んだ。

ホテルへの案内役だった私はそこでお役御免となり、家へと戻った。

「何があつたんです？」

後で聞いてみると、“ちと長くなるが”と先輩が前置きして話してくれた。

あの後、何とか怒っているのをなだめて通訳の人に説明してもらったところ、『影が見えた』という。

「あの親子から？」

「いや、あの時来た男の方は、近所にある不動産屋の店長。

一緒に来たのは、そこのお客さんだったん



「ただ……」

とにかくその2人を連れて来い、というので部屋に通した。

そのキリスト教系の方は今は引退しているが、神父の中でもかなり上位にいたらしく、いわゆる“悪魔祓い”も経験していたという。

部屋に入ってきた2人をジロリとにらみ、やがて視線は男の方に集中した。そして通訳を交えて会話が始まった。

「結論から言うと、“良くない存在”にたかられている、と言っただけ。デビルとかコボルトとか、向こうも説明に苦しんでいたようだけど」

一緒にいた女性が、何とかありませんかと頼み込んでいた。

「多分、私のせいだと思うんです……」

神父は黙っていたが、他の同席者が理由を聞いた。

その女性は幼い頃から、自分をいじめたり理不尽な事をしてきた相手が、なぜか不幸になるのを見てきたという。

「その不動産屋の店長は何を？」

彼女は2年前にその地元に移ってきたのだが、その時何件かの不動産屋に、物件をピックアップしてもらったという。

その男の店にも相談したが、結局は他の不動産屋が出した物件に決めた。

時が経ち契約更新時、住んでいた物件は建物を建て替えるため更新出来なかった。そこでまた、地元の各不動産屋に交渉しに行ったのだが、その中で例の不動産屋の対応が、

「アンタさあ、前にもウチ来たよね？」

「え？ はい」

「何でこっちに決めなかったの？  
あれだけ資料とか集めてあげたのに」

「……いえ、他のところに決まったので」

「ふーん？」

「じゃあ、そっち行けよ。」

「こっちも無駄に時間潰したくないしさ」

と、横柄を通り越してずいぶんと無礼な態度を取ったという。

「……いや、仮にも客商売でしょ。」

何か彼女に恨みでもあつたんですか？」

「後から他の同業者に聞いたけど、前から評判は悪かつたらしい。」

高額な物件の入居者や購買者以外に対しては、八つ当たりみたいな事をするんだと」

「よく問題になりませんでしたね……」

「ケンカになりそうだと、すぐに新人や受付に任せて、奥の部屋に引っ込んでしまつらしい。」

まあクズだと思つたよ、聞いてて」

罵詈雑言の対応に終始し、彼女は耐えられず泣きながら不動産屋を出ていった。

その夜、店長が自宅への帰り道を歩いていると、いきなりグイッと襟を引かれた。

転びそうになつたが、体勢を立て直して振り返ると、そこには植え込みの茂みがあつた。

そして、その茂みの中から“腕”が伸びているのが見えたという。

「ひえっ」

思わず叫び声を上げると、その腕は動きを止めた。

細いが、妙に赤黒く、外灯に照らされたそれはそのまま、茂みの中へスルスルと消えていった。

人が隠れる事の出来る茂みではない。

そしてこれを皮切りに、彼の周辺で異変が起こるようになった。

彼はマンションに住んでいたが、入社する時に戸締りをしようとしたら、

「ドアに、何かの引っ掻き傷がたくさん付いてたそうだ」

そのうち、妙な気配が室内でも感じられるようになり、巨大なコウモリの翼のような影を見たり、帰ってくると冷蔵庫の中の物が全て外に散らばっているという事が続発した。

ある時など、寝る前にベランダに何かいる気配に気付いてのぞいたところ、ミイラのような手が手すりをつかんでいた。

慌ててカーテンを閉めると、“バン！”と窓が叩かれ、布団の中で震えながら朝を迎えたという。

「朝恐る恐るのぞいてみたら、カラスが死んでいたそうだ」

ほとんどノイローゼ寸前になっていた店長を  
たまたま件の女性が街中で見つけた。  
“もしかしたら”と思って聞いたところ、  
彼女の予想通りの事が起きていた。  
それで、最寄の宗教施設である当寺院に  
連れてきたのだという。

「私はもう何とも思っていないんですけど……  
何とかならないでしょうか」

女性は申し訳なさそうにたずねた。  
神父は通訳を通して、彼女に帰るように  
指示した。

「ここから先はこちらの管轄です。  
安心してお任せください」

そして男性1人を残すと、近くの教会に  
連絡し、“お被い”の準備を依頼。  
その日のうちに終わったらしく、深夜に  
男性は解放された。

「もうあの女性とは絶対に会うな。  
誠心誠意謝罪しなければならないが、  
直接出会う方法ではダメだ。  
わかったか？」

男性は何度も頭を下げ、教会を後にしたと  
いう。

「しかし、その女性は一体何者だったんでしょう？」

それに“被った”ら、彼女は大丈夫何ですか？」

それも後で神父に説明されたという。

「まず、彼女は関係無い。

関係無くは無いのだが、どうにも出来るものではない」

彼女に“良くない存在”の血が混じっている  
と、神父は伝えた。

日本の物ではなく、キリスト教圏のもの。

「恐らく、何代か前に外国人の血が入ってきている。

その外国人に、“良くない存在”の血が混じっていたのだらう」

彼女に危害を加えた相手に不幸が襲い掛かるのは、仲間だと思って“ガード”していたのだらうと。

だから彼女が許そうがガマンしようが、何の関係も無い、という事だった。

「ま、素人だと思って舐めてかかったら、バックにヤザがいたようなモン。

“虎の尾”を踏んじまったワケだ」

ただ、不思議な事にその男に不審な気配を感じたのは神父だけで、その場にいた師匠や先輩も、何の気配も感じなかったという。

ちなみに数カ月後、その不動産屋を訪ねてみると、すでに店長は辞職し田舎に帰ってしまった後だったそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5021m/>

---

百怪 報いの怪8話

2011年1月27日09時50分発行